



小夜夏 ロニ子

© by Sayaka Roniko

イラスト めえお

© illustration Meeo

メイドロイド
ニニナに逆らえない

217-S

お団子、もう少し上が
好みでしたら調整します！

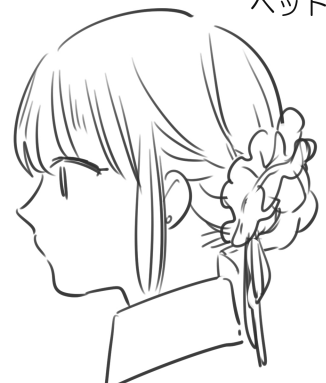
ピアスは
シンプルがいいですね
ダイヤかパール…



カチューシャ



お団子に
ヘッドドレス



ヴィクトリアン(?)



ブーツも可愛いんですがメイドさんというより
お人形さん感強くなっちゃうのでパンプスをチョイス

この作品は「メイドロイド・ニーナに逆らえない」全五話のうち、第1話、2話を収録した体験版です。

第一話 メイドロイド・ニーナに逆らえない

「おめでとうございます。貴方は当社の新型アンドロイドのモニターにご当選なされました」

玄関を開けると、目の前に立っていたメイド服の女性がそう言った。

軽くお辞儀をしてみせた彼女の金髪が揺れ、僕は現実感のない光景に思考停止する。出勤しようと急いでいた時に、あまりにも想定外のことだ。目の前で起きてしまった僕は、そのまま数秒固まった。

「……もしかしてわたくし、何う場所を間違えてしまったのでしょうか。お手数ですが、こちらの住所氏名が正しいものかご確認いただけませんか」

彼女はポケットから封筒を取り出し、中の紙を開いて見せた。

そこには確かに僕の住所と氏名、『モニターに当選しました。おめでとう 安齋研究所』という一文が書かれている。

「では確かにお間違えないようですので、貴方をマスター登録いたします」

一瞬だけ、女性の目が赤く光った気がした。

「マスター登録が完了しました。わたくし、家庭用メイド型健康管理アンドロイド
ーSと申します。お気軽に“ニーナ”とお呼びください。これからどうぞよろしくお
願いたします」

彼女は深々と頭を下げたが、事態について行けないのは相変わらずだった。

今の話し振りだと、この女性自体が家庭用アンドロイドらしいが、どう見ても人間
にしか見えなかった。悪い冗談としか思えない。

目の前の女性にまったく見覚えはないし、書面に書いてあった送り元らしき研究所
の名前にも心当たりはない。もちろんそんなモニターに応募した覚えもなかった。

新手のストーカーか何かだろうか。下手に刺激しないよう、なるべく丁寧に話そう。
妙な人に絡まれてしまったが、これ以上会社に遅れるわけにはいかない。

なんとかやり過ごしてしまおうと、とりあえずこれから会社に行くことを伝えた。
「帰りは遅くなるので今日のところはお引き取り願いたい」と言うと、彼女は頷いた。

「かしこまりました。ではお部屋の中で待機させていただきます」

ダメだ、話が通じない。

彼女はそう言つてすぐに部屋に入ろうとしたので、慌てて腕を掴む。

「大丈夫です。マスターの留守になさっている間に一通りの家事は済ませておきますので、どうぞご安心を」

そういう話ではないのだが、と言うと、彼女はこちらを向いた。一步近づき、正面から腰の辺りにするりと手を回される。

抱きしめられた形で上目遣いで見上げられると、突然近くなつた距離感に動揺して固まってしまった。

「マスター、脈拍が乱れています。軽度の発汗、体温の上昇、血圧の上昇を確認。強いストレスがかかっているようですが」

それはお前のせいだと思わず言いそうになつたが、澄んだ空色の瞳にじつと見つめられると何も言えなくなる。

よく見ればかなり顔立ちは整つており、日本人には見えない透き通るように白い肌、

大きく丸い空色の瞳にすつと通った鼻筋、慎ましく色づきの良い唇、後ろで編んできとめられた艶のある金髪と、僕なんかでは口を利くことすら許されなさそうな美貌だった。

うすうす美人だとは気づいていたが、ここまで至近距離で直視する羽目になるとその美しさに動揺してしまう。

「先ほどから『会社に遅れる』と何度も口にされるたび、心拍と血圧の上昇を感知しています。マスター、もしや本当は、会社など行きたくないのではありませんか」

本心を見透かされ、僕は言葉に詰まる。

確かに仕事は好きではない。

上司はすぐに怒鳴るし、ノルマはキツイし、残業も多い。その割に給料は低く、内容にもやりがいを感じていなかった。

いわゆるブラック企業勤めなのはわかっている。しかし、なかなか辞められないのだ。疲れ切った身体からだは正常な判断力をとくに失っているのだろう。

いつかどこかで限界が来るような気がして、そのいつかが早く来ないかな、という

消極的な思考で毎日をやり過ごしているのが現状だ。

そんなことに思い至ったタイミングで、スマホが鳴った。

上司からだ。間に合いそうな時でも呼び出して来るのは、きっと上司の方にもプレッシャーがあるのだろう。部下を使って売上を達成しないといけない立場なのは理解できる。それでもこの人は、とにかく部下を追い詰める以外のやり方を知らない人だった。

正直出たくない。でもさっさと出ないともっと面倒なことになる。大丈夫、出てしまえば意外と大したことがないのだ。どうせ怒鳴られるならさっさと終わらせてしまった方がいい。こうして迷っている間にも上司の理不尽な怒りは増していく。早く出なくては。パニック寸前の感情を無理矢理押さえつけ、僕はスマホを掴んだ。

しかし僕の体が緊張したのを感じ取ったのか、取り出したスマホは一瞬で彼女に没収された。

止める間も無く彼女は電話に出ると、話し始めた。

「母です。いつも息子がお世話になっております。身内に急な不幸がありまして、し

ばらくお休みをいただきます。息子が大変慕っていた方でしたのでかなり落ち込んでおり、とても人と話せるような状態ではございません。ええ。ご迷惑おかけいたしますが、何卒よろしくお願いいたします。はい。それでは」

電話越しに上司が怒鳴っているのが聞こえたが、彼女はまったく意に介さず電話を切った。

「電波通信を切りました。これでもう電話がかかってくることはありませんよ、マスター」

まっすぐに僕の目を見つめて、彼女は言った。

「本当はもう、限界なのではありませんか」

その一言で、僕の中で何かが崩れた。

「コーヒーはこの銘柄がお好きなのですか？ 特にこだわりはない。かしこまりました。では次は本格的な豆を挽いたものを用意しておきます。経費専用の口座にアクセスできるため、費用の心配は不要です。ご心配なく」

気づけば僕は、彼女を部屋に招き入れていた。

彼女は家にあつたインスタントコーヒーを淹れてくれた。

「ただ今コーヒーセットを一式、ネット注文いたしました。明日には届くかと存じます。インターネットには常時接続しておりますので、ご入用のものがあればいつでもわたくしを通して注文が可能ですよ、マスター」

彼女は散らかっていた部屋をテキパキと片づけながら言った。本当ならとても便利な機能だが、費用を請求されないのは怪しすぎる。

アンドロイドとはロボットのことだと思っていたのだが、機械には見えない滑らかな動きで部屋をあつという間に綺麗にしていく彼女を眺めながら、僕は半ば諦めてコーヒーをすすった。

彼女が淹れてくれたコーヒーは、家にあるものと同じとは思えないほど美味しくて、

驚いてしまった。僕が淹れてもせいぜい色のついたお湯になるだけなのに。お湯に溶かすだけのインスタントでもこんなに違いが出るものなんだな。

「お口に合いましたか。喜ばしい限りです。わたくしにはあらゆる家事の仕方がインストールされております。他にご用命がありましたら、なんなりとお申し付けくださいませ」

彼女はもう三つ目になったゴミ袋を縛って言った。

残業続きの毎日で散らかった男の一人部屋が、気づけばものの数十分ですっかり綺麗になっていた。

溜まったゴミはまとめられ、床には掃除機がかけられ、台所は綺麗に磨かれている。ずっとやらなくちやと思いつつ、これだけ溜まっていたら掃除だけで丸一日かかるだろうと思っていたのに、やり方をちゃんと知っている人がやるとこうも速いのか。どこか他人事のように感心して、僕は彼女の家事をする様子をぼんやりと眺めていた。スマホは部屋に入った途端、彼女に没収されていた。始めこそ焦ったが、彼女に黙って見つめ返されると、何も言えなくなつた。

人生が大きく変わってしまったのではないかという動揺はあったが、どこかほっとしてしまったのも事実だった。

仕事のことは、なんだかもう、どうでもいい気がしていた。

「マスター、冷蔵庫が空ですが、普段はどのようなものをお召し上がりになっているのですか？」

自炊はあまり得意ではなかった。カップ麺やレトルトカレーが多く、野菜はあまり食べない。

そのことを正直に伝えると、彼女は淡々と「さようでございますか」と言った。

「先ほど清掃の際に収集した情報から見て、マスターの食生活には栄養の偏りが見られます。ですがご安心ください。家庭用メイド型健康管理アンドロイド¹⁷ Sが、今後はマスターの食生活を管理いたします。ところでこのままですと昼食と夕食の分がございませぬが、買い出しに行ってもよろしいですか？」

ありがたいが、もしかしてそのままの格好で行くのだろうか。

金髪でメイド服の女性がこの部屋に出入りすることになると気づいて、僕は返事に

詰まる。

仕事をサボっている引け目もあり、誰かに見つかるような気がして、一緒に外出する気にもなれなかった。

「かしこまりました。宅配のものを手配いたします。昼食は何になさいますか？」

何も言っていないのに、彼女は買い出しに行くのをやめたいらしい。表情を見て察したとでもいうのだろうか。

「食欲がございませんか。かしこまりました。なるべくあっさりした消化に良いものをご用意いたします」

彼女は最初からずっと無表情のままだったが、出てくる言葉はどこか優しかった。

あらかた部屋が片付くと、彼女は動き回って乱れたスカートの皺を伸ばし、入り口の辺りで静かに待機し始めた。

立ったまま無言でこちらを見る彼女の視線に、少し気まぎれになった僕が一応コーヒーを勧めてみるが、「結構です」と断られる。

「お気遣いいただきありがとうございます。わたくしには飲食をする機能がついており

ません。ですがマスターがお望みとあらば経口摂取の形で内部に食品を格納することも可能です。ご覧になりますか」

もし本当に彼女がアンドロイドなら、機械の体にコーヒーを流し込むのはさすがに故障しそうな気がして断った。

「さようございますか。なお衛生面を考慮して、内部に格納した食品は最終的には取り出して廃棄することになっております。ご容赦くださいませ」

それっぽいことを言っているが、やはりアンドロイドということ信じ切れず、僕は少し意地悪な質問をした。

「内部に格納した食品の取り出し方でございますか。経口摂取と逆の要領で、口から吐き出し、水道をお借りして洗浄を繰り返します」

水をがぶ飲みして嘔吐する、と言っているようにしか聞こえない。人間だとしたら、バレないように設定を練つてあるようにも聞こえるが、やはり僕は、目の前の女性がアンドロイドだということを信じ切れていなかった。

「わたくしがアンドロイドであることをお疑いですか。かしこまりました。証明せず

とも今後の活動に支障はないと判断しておりましたが、マスターがご不安でしたら、なるべく刺激の少ない方法で証明することが可能です」

そういうと彼女は、お辞儀をするように前屈みになった。両手を足元に伸ばし、ロングスカートの中へと手を突っ込む。

そのまま腰の辺りまで手をやり、するりと黒い布を引き下ろした。

足に引っかけたその小さな布から両足を交互に引き抜くと、布をぼとりと床に落とすとした。

……どう見ても下着だった。

驚いて止める間もなく、僕はその光景を食い入るように見つめてしまっていた。

彼女がアンドロイドであろうと、実は人間であろうと、目の前で美しい女性が下着を脱いだのである。

突然のことに混乱し固まった体と、男の本能で硬くなり始める股間を慌てて自制しようとしながら、僕は彼女の顔を恐る恐る見る。

「セックスをいたしましょう」

身体を起こし、彼女は先ほどまでとまったく変わらない調子の声でそう言った。

「わたくしの身体は人間の女性とほとんど同じ構造になっており、擬似女性器を用いた性交が可能です。性交によって膈内に射精していただければ、何度射精しても、何週間経つても妊娠しないという事実を確かめることができます。この方法が、わたくしがアンドロイドであると証明できる最も遅い方法であるため、刺激が少なく推奨されております」

言っていることはめっちゃくちゃだし、どう考えても刺激が強すぎると思った。

やはり新手のストーリーカーなのだろうか。なんだかんだ言ってやったら怖いお兄さんが出てくる美人局つつもたせか、はたまた結婚詐欺か。

頭を抱えて僕はなんとか否定の返事を絞り出した。

「この方法はお気に召しませんでしたか。失礼いたしました。もう証明はしなくとも良いのですか。かしこまりました。なおわたくしを性欲処理に使用することはいつでも可能です。遠慮なくご用命くださいませ」

何かの間違いが起きる前に、とりあえず下着を履いてもらうことにした。

彼女は数秒固まった後、大人しく下着を履き直した。

お昼頃になって、彼女が頼んだであろう出前のうどんが届いた。

電話したそぶりはなかったし、ネット注文が知らぬ間にできているというだけでも、彼女を信じていいような気がしなくはない。

シングルベッドを置いただけで半分埋まってしまうようなこの狭い部屋に、テーブルと椅子のセットはなかった。あるのは小さなローテーブルだけで、いつもベッドを椅子代わりにして食事を済ませていた。

棒立ちの彼女にただじつと見られているのも気まずくて、とりあえずどこかに座ってはどうかと勧めると、彼女は「恐れ入ります」と言っ僕隣の腰掛けてきた。

柔らかい身体の感触がわかるくらい、ほとんど密着した状態になる。金色の細い髪

からは雨の日の花屋のような、甘くて優しい香りがした。

「見目麗しい女性を侍らせるとは、男性にとつて気分が良いものだと言います。インプットされております。もしやご不快な思いをさせてしまいましたか」

このアンドロイド、自分のことを見目麗しいと自覚しているらしい。しかしまんざらでもなかった僕は、照れながら小さな声で「大丈夫」と言った。

「それなら良うございました。どうぞお気になさらず、お食事をお楽しみください」腕に押し付けられる彼女のふんわりとした身体の感触に意識が行ってしまい、味はほとんどわからなかった。

食べ終わると、彼女は器を片付け、僕を強引にベッドに寝転ばせた。

「マスターには休息が必要です。先ほどのスキャンで栄養、睡眠ともに不足していることがわかっております。必要なサプリメントも手配いたしましたので、今はごゆっくりおやすみください」

彼女は思ったより強い力で僕をベッドの中央に押し倒し、布団をかけた。

「後のことは何も心配されなくとも良いのですよ。目が覚めても、近くにはわたたくし

がおります。溜まった疲れが取れるまで、今はどうかごゆるりと眠ってくださいませ」
強引な流れに困惑しつつも、僕はどこか彼女を信頼し始めていた。

メイドとして主人に奉仕する、一応そういう言動を貫いていたからだ。少々強引なところはあがるが、彼女は僕のためになることしかしていない。

そしてその強引さに、助けられたのも事実だった。

大人しくベッドの中から彼女を見上げると、彼女が初めて、ふっと笑った。

「おやすみなさいませ」

その笑顔を見て、僕の中に残っていた躊躇ためらいが少し消えた気がした。

目を閉じた僕は、そのまま眠りへと落ちていった。

それからどれくらい経ったのか、目を覚ますと、部屋は真つ暗だった。

朝からずっと眠ってしまったのか。順番に記憶が蘇ってくる。

会社をサボって一日中寝ていたのだ。上司にどれだけ怒鳴られるかわからない。

そこまで思い出して、そもそもこうなった原因の女性がまだ部屋にいることに気づ

く。

見ればキツチンの辺りにだけ、小さく灯りがついていた。

なんだかい匂いがして起き上がると、聞き覚えのある彼女の声でした。

「大変申し訳ありません、ご主人様。物音で起こしてしまいましたか。より一層静かにいたしますので、そのままもお休みになられてはいかがでしょうか。もう良いのですか。かしこまりました。お加減はいかがですか」

物音で起きたわけではなかった。本当にぐっすり眠っていたのだ。

僕が大丈夫と答えると、彼女は返事をした。

「それは良うございました。お食事の用意が整っております。軽くスープでも召し上がりませんか？」

僕はうなずいて、軽く伸びをした。

気の済むまで寝たせいかな、なんだか体が軽い。

彼女の用意したスープを口にすると、薄味なのに汁が利いて美味しかった。

「お口に合いましたら幸いです。ネットスーパリーの当日便を今朝手配してお

きましたので、食材は揃っております。食欲がございましたら、他にもお作りいたしますが」

お言葉に甘えて、僕は彼女に追加の料理を作ってもらうことにした。

消化に良いものを食べてぐっすり寝たからか、すっかり身体は休まっていた。今のスープで胃が動き始めた感じもする。なんだか食欲も湧いてきた。

彼女がテキパキとこしらえた野菜炒めや肉料理に舌鼓を打ち、僕はすっかり満足して食器を置いた。

「食欲もすっかり戻られたようですね。うれしい限りです。ご入浴の支度もできておりますが、いかがなさいますか」

風呂か。普段は急いでシャワーを浴びるだけだから、たまにはゆっくり入るのもいいかもしれない。

僕は彼女の言葉に甘えることにして、風呂場へと向かった。

浴槽には湯がためてあり、良い香りのする入浴剤まで入れてあった。入浴剤なんて置いてなかったはずだから、これも一緒に買ったのかもしれない。

服を脱いで体を洗い始めると、風呂場の扉をノックする音がした。

返事をする前に扉が開き、メイドがさも当然のような顔をして入ってきた。

「失礼いたします。お湯加減はいかがですか？」

大丈夫です、何入って来てるんですか、などと言つて動揺する僕に「それなら良うございました」とだけ返事をし、彼女は袖のボタンを外して腕をまくった。

「お背中を流しに参りました。ご安心くださいませ。わたくし洗体・エステに關しましても、業界トップクラスの店舗から技術提供を受けております」

それは果たして家事なのだろうか。

健康管理の範疇はんちゆうと言われれば、まあそうかもしれないが。

余計なことに気を取られている間に彼女は背後へと近寄り、ボディソープを手を取つて泡立て始める。

「お客様、アカスリコースとマッサージコースがございますが、どちらになさいますか？」

お客様って。本当にお店みたいになってきたな。

僕はもう諦めて流れに身を任せることにした。

最近疲れていたし、せつかくなのでマッサージコースを選んでみる。

「かしこまりました。当店のご利用は初めてですか？」

完全に何かの設定が始まっている。正面の鏡に映る彼女の表情はさっきまでと同じ無表情なので、冗談なのか定かではない。

そもそもアンドロイドは冗談を言えるのだろうか。

「かしこまりました。それではマッサージを始めさせていただきます。力を抜いて楽にしてくださいね。お客様、ずいぶん肩が凝っていらつしやいますよ。お仕事は何をなさっているんですか？」

これもう技術提供受けたんじやなくてただの研修済みの社員だろこの人。お店のセリフをそのまま言ってる可能性まである。

いや、もしそのまま言ってるなら逆にロボットっぽい気もする。

どっちなんだ。

「戯れにそれらしく振る舞ってみました。いかがでしたか？」

「どうやら彼女は真顔でふざけていただけらしい。」

真面目な顔して、案外茶目つ気のある奴なのかもしれない。

「なんだか肩の力が抜けて、思わず僕は軽く笑ってしまった。」

「技術は本物ですのでご安心を」

彼女はほんの少しだけ微笑むと、真剣に僕の身体を洗い始めた。

自信ありげに言っただけあって、その技術は想像以上だった。

凝り固まった肩や首、腰が泡付きの手になめらかな動きでほぐされていく。

本格的な手つきのマッサージュに、思わずため息を漏らす。

「お気に召されたようで何よりです」

彼女の手が体の前面に回り、鎖骨周りから胸筋をリンパを流すように撫で回される。

指先が何度か乳首を通り、くすぐったさに少しだけ声を上げてしまった。

「力加減が強すぎる、弱すぎるなどありましたらおっしゃってくださいね。もつと重

点的にやって欲しいところなどもあれば、どうぞご遠慮なく」

彼女の手が、気のせいかな他の部分よりも長い時間胸の辺りに滞在し、手のひらで大

きく揉みほぐされる。

偶然とは思うが、細い指先が乳首をかすめる回数が増えたような気がした。見目麗しい女性に鏡越しに見つめられながら、何度も乳首を触られていると、さすがに徐々に変な気分になってくる。

心なしか刺激に敏感になっていくような気もして、なんとなく気まずくなり、僕は彼女から目を逸らした。

「……どうかなさいましたか、ご主人様」

彼女が声のトーンを落とし、まるで囁くように耳元で言った。

反射的に、背筋がゾクリとする。

「……上半身のコリが顕著でしたので、少々念入りにマッサージわこなを行っております。ご主人様にもっと喜んでいただけるところが、どこかにある気がするのですが……」
あたたかい吐息と共に吹き込まれる彼女の囁き声に、これまでとは違う妖しい色を感じて、僕は思わず鏡越しに彼女の顔を見てしまう。

少しだけ目を細めた彼女は、気持ち口を僕の耳元に近づけながら、ゆっくりと微笑

んでみせた。

「……知っておりますよ、ご主人様」

彼女のセリフに、ビクリと身体が強張る。

「……ご安心くださいませ。メイドはご主人様のすべてを受け入れます。ご主人様の心と体の健康のためには、どちらも共に満たされるのが肝要です」

彼女の手のひらがゆつくりと離れ、指先だけが胸に触れた状態でピタリと動きが止まる。

「……ご主人様はただ一言、ご命令下さるだけでよろしいのです。メイドはどんなことでも、ご主人様に従います。他人には言えないような、どんな願いでも……気にせずおっしゃってくださいませ……メイドはアンドロイドですから、なんとも思いません……ほら……」

彼女の白く細長い指が、徐々に胸の中心へと、爪を立てた状態で迫る。

じわじわと胸の皮膚感覚が敏感になっていき、中心にあるもつとも敏感な部分への刺激を想像してしまつて、徐々にそれしか考えられなくなっていく。

「……お好きなんですよね。こういうの」

彼女の指先が、乳輪の周りをくるくるとなぞり始めた。

ゾクゾクと、背筋を新たな感覚が這い上つていく。

「……ち・く・び♡」

彼女の指先が、両方の乳首をピン、と弾いた。

その瞬間、想像以上の快感が電流となつて走り抜け、股間までもが痺れた。

「……今のでお分かりになりましたか？ メイドには、すべてバレているんです……」

ほら、ご命令なさってくださいませ……メイドは絶対にご主人様を拒絶いたしません。

どんな願いでも……どんなに「恥ずかしい」願いでも……♡」

彼女の声音が、いつの間にかとろけるような甘い響きをはらむ。

「……ご主人様のスマートフォンを預かった際に、すべての検索履歴、閲覧履歴、画

像、音声ファイルをスキャンさせていただきました……。随分とたくさん購入なさつ

ているんですね……エッチな音声作品……♡」

熱い吐息と共に吹き込まれる彼女の言葉に、それだけで背筋を快感が走る。

「購入されていた音声作品の傾向から、呼び名も変更いたしました……。この方がお好きなんですよね……。ご・しゅ・じ・ん・さ・ま♡」

そうだ。起きた時から、気づいてはいた。

彼女の僕に対する呼び方が、起きたら「マスター」から「ご主人様」に変わっていることに。

そのことに、僕は密かに喜びを感じていたのだ。

しかし彼女には悟られないよう、必死に隠していた。

「……もうお分かりですよね……。わたくしが、何を見たのか……。何を聞いたのか……。その結果、わたくしが、その通りに振る舞ってくれそう、という期待、してしまっているんですよ……。♡」

言えるわけがない。恥ずかしくて、他人に言えるようなものではない。だから必死に平静を装っていた。

しかし本当は、ずっと興奮していた。

ましてやこんな美人相手には、バレただけで死にたくなるほど恥ずかしいのに。

とつくにバレていたのだ。

「……さあ、ご命令ください……ご主人様の本当にしたいこと……いいえ……ざれたい”こと……♡ ありますよね……ほら♡」

鏡越しに見えた僕の顔は、情けなく歪んでいた。

「……はい♡ かしこまりました♡」

僕は、何でも言うことを聞いてくれるメイドさんに。

「……”優しくいじめられたい”、ですね♡」

変わっていないはずの彼女の微笑は、何故だかひどく淫らに見えた。

第二話 メイドロイド・ニーナはご主人様の命令を必ず叶えます

僕の体を洗うニーナの手つきが、ゆつくりとねちつこく、いやらしいものへと変わっていく。

「ええ、わかっておりますよ……ご主人様は……」

泡まみれの手が乳輪の周りを執拗に撫で回し、指先が乳首を何度も軽く弾く。

その度に快感が脳へと響き、僕は後ろから彼女に抱きしめられた体勢で身悶えしていた。

「……マゾ、なんですよね♡」

彼女の口から出たマゾという単語に、背筋がゾクリとする。

「こうやって、身動きできない状態で、女性にいじめられて……耳元で囁かれながら、乳首責め……されてみたかったんですよ♡ ご主人様の大好きな、いつもオカズに使っている音声作品みたい……♡ わたくしもすべて拝聴いたしましたから、ご主

人様の性癖はよく存じ上げておりますよ」

今まで誰にも言ったことがなかった秘密の性癖を暴かれる羞恥に、顔が熱くなる。しかし同時に、彼女が囁くたび、ゾクゾクと得体の知れない感触が背筋を這い上っていく。

この感覚がなんなのかは、とづくにわかっていた。

羞恥心を煽られながら、男なのに乳首を責められて、明らかに僕は快感を感じていたのだ。

「こうやって耳元で、いやらしいセリフ言われたかったんですよ……お気づきですか？ 声音もご主人様の大好きな声優に寄せて、やや変えております……。ええ、人口声帯ですので……他にもいろんな声が出せますよ……。ご主人様は、少し低めで、大人っぽいお姉さんの声がお好みなんですよね……。このくらいですか？」

彼女の声質がほんの少し低くなり、妖しく艶めいたものをはらんでいく。

「あ……身体、ビクって跳ねましたね……。今のわたくし、学習いたしました……性癖ど真ん中の声質、これ”ですね♡ かしこまりました」

鏡越しに見える彼女の顔はまったく表情を変えることなく、僕を淡々と追い詰めていく。

「乳首の触り方は、いかがでしたでしょうか……すりすり撫でられるのと……」
彼女の指先が、ゆつくりと焦らすように乳輪を撫で回す。

「ピン、ピン、と弾かれるのと……」

指先で軽く乳首を弾かれ、快感に思わず声が漏れる。

「カリカリ引つかかれるのと……」

爪先が乳首の先端を引つかくように往復し、甘い快感が広がっていく。

「クニクニつまんで転がされるのと……」

敏感になった乳首を二本の指でつままれ、縫より合わせるように転がされると、ピリピリとした快感にこめかみの辺りまでもが痺れた。

「……キユ、つてつねられるの♡」

さつきよりも強い力で乳首を摘まれ、電流のような強い刺激が胸から脳へと駆け上がる。

「どの触り方がお気に召しましたか？ ご主人様のお好きな刺激で、お好きにだけ、乳首いじめて差し上げますからね……♡」

鏡越しに彼女と目が合うと、彼女はアンドロイドとは思えない淫靡いんぴな微笑を浮かべた。

「……あらあら。まだほんの少し乳首で遊んで差し上げただけですの……おちんちん、たいへんなことになってしまいましたね」

もう言い逃れできなかつた。鏡に映ってしまっているのだ。乳首を弄ばれるばかりですつとお預けを食らっている、完全に勃起したペニスが。

「……触ってほしいですか？ ダメですよ。まだ触ってさしあげません」

彼女は泡をまぶした手で上半身をぬるぬると撫で回し、焦らすように乳首を撫でながら言った。

「ご主人様の命令は絶対ですから……何でも言うことを聞いてくれるメイドさんに、優しく“いじめられたい”、でしたよね……♡ ところで、ご主人様の嗜好ですと、“いじめられる”と申しますのは……」

彼女の手が徐々に下がっていき、太ももの付け根、鼠径部をなぞる。

「射精させてもらえない」、という意味かと存じます♡」

彼女の解釈に、ゾクリと背筋を快感が駆け上る。

鏡越しに合った目を、逸らさせてもらえない。

魅入られたようにその空色の瞳を見つめながら、僕はかろうじて小さく首を振った。射精したい、という意思を込めて。

「かしこまりました」

ペニスまで数センチのところをゆっくりとくすぐりながら、彼女は言った。

「……射精したい、射精したい、と何度お願い願っても、射精させてもらえない、そういったプレイをご所望ですね♡」

嗜好を完全に読み取られた提案に、鏡に映る自分の顔が情けなく歪むのを見た。

「……この続きはベッドに戻ってからですよ、ご主人様♡ 早く上がってきてくださいね♡ お待ちしておりますから♡」

彼女は甘い声で囁くと、シャワーで泡を流した。少し湯船で温まってから来てほしい

い、と告げて風呂場を出て行く。

ペニスにはまったく触れられずに焦らされていた僕は、興奮冷めやらぬまま急いで湯船に浸かる。

体が温まるのを待つ間も、この後彼女にされることで頭がいっぱいだった。

彼女がアンドロイドだということは、もう完全に信じていた。

誰にも言ったことがなかった嗜好をここまで短時間で読み取られていたのだ。本当に端末の中を見られているに違いない。さらつとパスワードのロックも破っているし、とても人間業（にんげんわざ）とは思えなかった。

僕は風呂から上がり、急いで体を拭く。

いつも着替えは部屋に戻ってからだ。バスタオルを腰に巻いただけの格好で、僕は部屋に戻る。

男の一人暮らしだからと、いつもは気にせず裸で部屋まで戻っていたが、今日は違う。

ベッドには、ニーナが腰掛けていた。

彼女は僕に気づくと、こちらを向き声を発した。

「こちらへどうぞ」

いつもの声に戻っていた。

彼女はベッドの隣を手でぽんぽんと叩いて招く。

何も言わず、僕は彼女の隣に腰掛ける。

彼女は僕の両手を取ると、自分の両手で優しく握った。

体を斜めにしてこちらを向いた彼女にうながされ、向かい合う形になる。

「お湯加減はいかがでしたか」

彼女は僕の手の甲をすりすりとは撫でながら、そんなことを聞いた。

よかったよ、と答えると、彼女の両手が僕の手を包み込むように動く。

「それは良うございました」

そのまま手の甲から上へ、するすると腕を伝い、肩へと順に撫でていく。

「しっかりと温まっていたただけたようでは何よりでございます」

彼女のやわらかい手のひらが、肩から胸にかけて、ゆっくり撫でさする。

「……ふふ。もう待ちきれませんか？」

彼女の目線が、バスタオルを押し上げる屹立へと向けられる。

「心拍、呼吸、体温、どれも上昇の数値を示しています……ずいぶん興奮してらっしゃるのですね」

彼女と目が合う。指摘された通り、僕の呼吸が速くなっているのがわかる。

彼女の指先が、乳首の周りをくるくるとなぞり始める。

「ご主人様のご命令通り、これから、優しくいじめて差し上げます……たつぷりと焦らしながら♡」

乳輪を念入りになぞる彼女の手つきは、敏感な先端に触れそうで触れない距離を保っていた。たまに乳首に触れそうな位置で静止してみせると、じつと僕の目を見つめる。

「……もの欲しそうな顔♡ そんなに乳首で気持ちよくなりたいんですか？」

彼女の目は、ほんの少し笑っていた。

優しい目つきとは裏腹に、ともすれば嘲笑とも取れそうなセリフにゾクリとする。

「さあ、素直になってみましょう。その方が、もっと気持ちいいこと……」

彼女の声が、変わった。

風呂場での短い行為のうちに一瞬で学習されていた、僕のもっとも興奮するトーンへと。

「……してもらえますよ♡」

少し低い、妖艶な女性の囁き声が、この距離でも耳元で吹き込まれたかのように耳朶じだを打つ。

再び動き出した乳首を掠めかすそうになる指先に焦らされながら、僕はゴクリと唾を飲んだ。

これから与えてもらえる快樂への期待感を散々煽られ、僕の理性はもう、限界だった。

「さ、ご主人様。ご命令くださいませ。わたくしに、どこをどうされたいのですか？」
僕はもう恥ずかしげもなく、「乳首触ってください」と口走っていた。

「……あらあら♡ それでは命令ではなく、『お願い』になっちゃいますよ♡」
彼女がクスクスと笑いながら、指先の動きを止めた。

「かしこまりました。そこまで仰るなら致し方ありませんね♡」

僕の目線が、快樂をお預けされている乳首へと一瞬向いてしまう。

「今からこのいやらしく勃起した乳首……たくさん可愛がつてさしあげます♡」

その瞬間、両方の乳首がピン、と弾かれた。

さっきまでよりも強い快樂が電流となつて走り、僕は思わず仰け反つた。

「そうそう♡ 待ちに待つた乳首責め、そうやって浅ましくお胸突き出してしつかり味わつてくださいね♡」

そのまま両方の乳首は間隔を空けながらピン、ピン、と爪弾かれ、その度にとろけるような快感が乳首から股間まで駆け抜ける。

あ、あ、と自然に声が漏れ、彼女がクスクスと笑つた。

「恥ずかしい声漏れてしまつていますよ、ご主人様♡ これそんなに気持ちいいんですか？」

ふたたび彼女と目が合い、彼女の慈しむような目から視線を逸らせなくなる。

その優しい表情とは対照的に、両手の指先は不規則な間隔で意地悪く乳首をなぶり

続ける。

「その反応、乳首完全に開発済みですよね♡ ええ、存じております♡ メイドに優しくいじめられる音声作品聴きながら、自分でオナニーして開発したんですよ♡ それを本物のメイドに再現されて、ご気分はいかがですか？」

指で性感帯を責められ、言葉で性感を煽られ、あ、あう、と情けない喘ぎ声が漏れるのを止められない。

「あらあら、気持ち良くて力抜けてしまいましたね♡ さ、どうぞ楽にしてメイドに身を預けてくださいませ」

彼女の手が後頭部に回される。そのままもう片方の手でトン、と胸元を押されると、僕は簡単にベッドに転がされてしまう。

「失礼いたします」

彼女は立ち上がると、腰掛けた姿勢のままだった僕の両足を持ち上げ、背中に手を回した。軽々と僕の身体が半回転され、ベッドの上に両足を伸ばして寝転んだ体勢にされる。

続いて彼女もベッドに乗り上がると、僕のお腹の辺りをまたいで膝立ちになった。

「ここまでのご主人様の反応から、もつとも感じやすい愛撫の仕方を算出したしました」

彼女がロングスカートの布をゆっくりとたくし上げていく。

太ももの辺りまで露わになるほど布がめくられると、黒いニーソックスがガーターベルトで留められているのが見える。

わずかに見えた太ももの異様に白い肌に、僕の目は釘付けになった。

次の瞬間、彼女は布を前へと放り、僕の上半身は首の辺りまで彼女のスカートに覆われた。

「このスカートは二重構造になっておりまして、内布はシルクの本ほんしゆす繻子でございます」

彼女がそう言って僕にかけられていたスカートを注意深くめくると、濃黒のツルツルとした布地が一枚、僕の上に残った。

「サテン、とも呼ばれますね」

彼女の両手が、爪を立てた十本の指先で、僕の胸元を布の上からなぞりあげた。

スルリとした布越しの感触は味わったことのないくすぐったさで、僕は身悶えする。「ふふ、くすぐりたいですか？ 肌に沿うとろりとした感触が、この生地の良いところでございます。この生地の上から、こうして……カリ、カリ♡」

彼女の爪先が、両方の乳首を軽く引っかいた。

一瞬で閃光のような快楽が脳へと走り、強烈な快感に思わず仰け反ってしまう。

「やっぱり♡ ニーナの計算通りです♡」

彼女の指先が、乳首に触れるか触れないかくらい的位置を、何度も往復する。

滑らかな布越しの感触が摩擦を和らげ、引っかかる痛みをゼロにしていた。純粹な快楽だけが抽出され、爪先が乳首の先端をかすめるたびに快感が脳で弾ける。

「ご主人様は、乳首こうしてカリカリされるのがいちばん好きなんですよね♡ お

風呂場で色々試しましたけれど、この触り方ときだけ反応良かったですものね♡

バレバレですよ♡」

彼女の責めは的確だった。強過ぎず、軽く引っかいているだけなのに、その往復運動は信じられないほど鮮烈な快楽を生んだ。

膝立ちだった彼女が腰を下ろし、機械の体の重みをかけられ身動きが取れなくなる。逃げ出すことのできない状態で与えられる快樂に、何とか動かせる背中が自然と反り返ってしまう。

「あらあら♡ お胸突き出しておねだりですか♡ もっと触って欲しいんですものね♡ 素直になってくださって嬉しいですよ♡」

すでに蕩けた頭で、ち、違う、そんなつもりじゃ、とポーズだけでも抗議しかけたが、彼女にピンと乳首を弾かれるだけでまともな言葉を発せなくなる。

「ほら、お肌の感覚に集中してください♡ 普段はメイドの内ももに触れている内布スカート、お肌にとろりと密着してとっても気持ち良いですね♡」

彼女の肌に触れていた布が、自分の肌に触れている。一度そう認識してしまうと、興奮しきった脳は彼女のなめらかな肌に密着されているかのように錯覚してしまう。顎のすぐ下までかけられたスカートからは、なぜか甘い匂いすらしていた。

「すっかり勃起したいやらしい乳首、布の上からでもよくわかりますよ♡ ほら、ここ♡ ここですよね♡ メイドのためにわかりやすく布を押し上げてくださって、あ

りがとうございます♡ お心遣い誠に痛み入ります♡ これはぜひともお礼をいたしません♡」

ピンポイントで乳首の先端をカリカリと引っかき続けていた白く細い指が、思わせぶりなゆったりとした動きになる。

「ご主人様は焦らされるのが大好きですものね♡ こうしてゆっくりと……カリ……カリ……♡」

たつぷりと間をとって乳首が引っかかれ、突然始まった焦らしプレイに僕は腰までをくねらせてよがった。

「カあり……カあり……♡ どうなさいましたか？ もっと速くしてほしいのですか？ ダメですよ♡ まだお預けです♡」

彼女の指先が爪を立てて右に、左にとごくゆっくり弾く間も、乳輪をクルクルとなぞって性感を高めるのを忘れない。

「お胸反らせて腰くねらせて、もどかしい乳首の快楽がたまらないですよ♡ とつてもかわいらしいですよ♡ はい、どうぞ♡」

彼女の指先が不意打ちで乳首の先端をカリカリと引つかき、待ちに待った強烈な快楽に僕は一際大きな声を上げながら体を跳ねさせた。

乳首から走った快感は股間へと一瞬で神経を繋げ、ペニスがビクビクとのたうつ。「乳首触ってもらえて良かったですね♡ たつぷり焦らされた後にこうやって速いペースでカリカリ、カリカリ、カリカリ♡ お預けされてた分倍も快楽が膨れ上がって、喘ぎ声我慢できませんね♡」

彼女の爪先が素早く乳首の先端を往復し、鮮烈な快楽で脳内をとろかさされる。

「毎日ご自分で乳首開発してきてよかったですね♡ メイドの乳首責めをこんな気持ち良く堪能できるのは、ご主人様の日々の努力の賜物です♡ 勤勉な主を持つてわたくしニーナも誇りに思いますよ♡」

完全に好みを学習した容赦のない指先の動き。羞恥を煽る言葉責め。

彼女はあまりにも的確に僕をマゾの快楽へ優しく墮としていく。

彼女のお尻が少し動き、僕のペニスを軽く押した。

「こうして乳首いじられてると、おちんちんまで気持ちよくなってしまうんですね

♡ ええ、存じておりますよ♡ わたくしのお尻に、さつきから当たっておりますもの♡ ギンギンに勃起して反り返ったおちんちん、先程からバスタオルの下でピクンピクンって跳ねっぱなしですものね♡」

彼女の片手が後ろに回り、タオルの上からペニスをつつ、と撫でた。

たったそれだけでも焦らされ続けたペニスには信じがたいほどの快感が走り、全身がビクリと跳ねる。

「あらあら、我慢汁がこんなに染みてしまつては、タオルの意味がなくなつてしまいますね。すぐにお取り替えいたします」

彼女は僕と目を合わせたまま、後ろ手に腰のタオルを取り払った。外気に晒さらされたペニスがビクリと脈打つ。

「ああ、わたくしとしましたことが。たいへん申し訳ございません、タオルの替えを用意しておくのを忘れておりました。すぐに代わりのもので拭わさせていただきます……♡」
彼女はタオルを横に置くと、後ろに片手を回した。

にちゅ、と粘液が音を立て、ペニスに彼女の指が巻きついた。

今まで一度も触れられて来なかったペニスは、たったそれだけの刺激でも悦び打ち震えてしまう。

彼女のやわらかい手のひらが先端を撫で、溢れ出る我慢汁をペニス全体へと塗り広げていった。

いきなり襲った強烈な快感に腰が跳ねる。

しかし上に乗ったニーナにグツと体重をかけられ身動きできない僕は、ペニスだけをビクビクと振り立てた。

カウパー線液を十分に塗りとくると、彼女の指先が再びペニスへふわりと巻きつく。そのまま彼女は逆手でペニスをゆっくりと扱き始めた。

焦らされることに慣れていた体を襲った突然の純粋な快樂に、頭の中が真っ白になり、腰を跳ね上げてしまう。

「まあ、腰を突き出していたいただきありがとうございます♡ おかげで清掃がしやすくなりました。どうかやさしかったですか？ ええ、清掃ですよ。手近なものがありませんでしたので……タオルの代わりにわたくしの手で、ペニスを拭いております♡」

彼女は何でもないことのように言ってみせた。

その間もペニスはゆるゆると扱かれ、先端から根元までを大きな動きで扱き扱かれる。

何度か往復する内に力加減が変わっていき、僕が一際大きく声を上げたところで力加減が決定された。一番感じる刺激の仕方を学習したのだろう。

絶妙な力加減で彼女の指がペニスを握り、手のひらでは亀頭をぐりぐりと撫で回され、僕はあまりに強い快感にとろけ切った悲鳴を上げた。

「ふふ♡ おちんちんやつとシゴいてもらえましたね♡ 良かったですね♡ いつもご自分で磨いていらつしやるご主人様の立派なおちんぽ、磨くのはもうメイドのお仕事ですよ♡ 主人の持ち物を手入れするのはメイドの務め♡ 今宵も誠心誠意磨き抜きますからね♡」

ゆつたりとした動きからは想像もできないほどの快樂が、股間から脳へと駆け上がっていく。

彼女の手の動きは彼女自身が壁となつて見えないが、まるで股間を何か別の生き物

に咀嚼されているかのようだった。味わったことのない壮絶な手コキをされていることだけは、異常な快感により嫌でもわかってしまう。

「ほら、ご主人様の弱いところもつと触つて差し上げます♡ カリ、カリ♡」

ペニスを握る手を動かし続けたまま、彼女の反対の指先が乳首を引っかき始める。手コキされながらの乳首責めに、乳首の先端から股間まで一気に電流が流れて両方の快樂神経が繋がってしまう。

どちらか単体では決して味わえない、視界が明滅するほどの暴力的な快感に僕が泣き叫ぶと、彼女は微笑んだ。

「ツルツルしたスカートの上から乳首カリカリされて、おちんちんも大好きなペニスでシコシコされて、とっても気持ちいいですね♡ ご主人様の幸せそうなお顔、大好きですよ♡ もっとよく見せてくださいませ♡」

彼女の上半身がゆっくりとこちらに倒れてくる。

端正な顔立ちが迫ってきて目の前で止まり、アンドロイドとは思えない自然さで微笑んだ。

その間も乳首とペニスをいじる手は止まらず、僕は彼女の空色の目から目を逸らせ
ないまま、鮮烈な快感に情けなく喘ぐことしかできない。

彼女はワントーン落とした声で、僕を慈しむように見つめながら言う。

「あらあら、そのお顔、もしかしてもうお射精近いのですか♡ まだほんの少しおち
んちん遊んで差し上げただけですの♡ 仕方ありませんね♡ 憧れのメイドさんに
たっぷり乳首責めされて、お射精準備万端で勃起させてましたものね♡ このまま乳
首だけでもお射精できてしまうのではありませんか♡ ふふ、それも面白そうですね
♡ 今度やってみましょうか♡ おちんちんには一切触らず、乳首だけで、お射精♡
お胸突き出して乳首いじられっぱなしで、ずうつと甘い快感に浸けられて、我慢でき
なくなっておちんちんビクンビクン♡ お空に向かって精液とぶとぶ♡ おちんちん
まったく触れられていないのに、情けなくお漏らし♡ とつても気持ち良いですよ
♡ ニーナと一緒に挑戦してみましようね♡ 大丈夫です、ご主人様ならきつとでき
ますよ♡ さあ、お射精練習しておきましようか♡ 射精の感覚よく覚えてください
ね♡ ほら、3、2、1……」

彼女の扱くペースが上がっていき、乳首を素早く引つかかれる。一気に射精欲が押し寄せ、睾丸がギュツと持ち上がった。

振り返ったペニスから今にも精液が出そうになったところで、

「はい、ストップ♡」

彼女の手が突然止まった。

ペニスも乳首も完全に放置され、射精直前の一番気持ちいい状態に放り出された僕は叫ぶように喘ぎ悶えた。

「ふふ、おちんちんすつごくビクビクしてますよ♡ イキたかつたんですものね♡

「ざあんねん♡ まだダメですよ♡ 射精はお預けです♡ ご主人様のご命令されたのですよ♡ 射精したい、射精したい、と何度お願い願っても、射精させてもらえない、そういうったプレイを所望すると♡ わたくし必ずご主人様に従いますので♡ ご安心くださいませ♡」

彼女の手が再びゆるゆると上下に動き始め、一度はおさまった射精欲がすぐに湧き上がってくる。

「ほら、もう一回寸止めいたしましたしよろしくね♡ メイドさんのお手での感触に集中♡

乳首とおちんちんの快楽に集中ですよ♡ 射精直前で敏感な亀頭をなでなで♡ カリ

首シコシコ♡ 乳首もカリカリ♡ 気持ちいいところ全部かわいがられて幸せですね

♡

寸止めであることを宣言され、絶頂できないとわかっていても、男の感じるツボを知り尽くしたニーナの手コキと乳首責めに、脳の快楽神経が灼き切れそうになりながら腰を跳ね上げるのを止められない。

ニーナに機械の体重で重みをかけられ、身動きできずにペニスだけを無様に振り立てることしかできないまま、僕は喘ぎ叫んだ。

彼女が顔を少し動かすと、耳元に唇を寄せる。熱い吐息と共に嘔きが吹き込まれる。

「……あつ、あつ、出る、出る、精液出る出る、もう出ちやう♡ もうダメ、あつ、こんなの、我慢、無理、こんなの無理だよ♡ あつ、あつ、もう、イク、イク、イクイクイク♡ ふふふ♡」

笑いながら演技で喘いでみせた彼女の甘い声に、一瞬で射精直前まで追い込まれる。

馬鹿にされているようなのに、それで酷く興奮してしまっているのを見透かされているのがたまらなく恥ずかしくて、たまらなく気持ちよかった。

「はい、ストップ♡ 射精は禁止です♡」

彼女の手が再び止まり、僕は悶絶した。

「寸前で絶頂を取り上げられた僕のペニスから、不満気に我慢汁がびゅつと噴き出るのがわかった。」

「イキたいですか？ イキたいですよね♡ ええ、存じております♡ でもまだまだイキたくないんですよ♡ イキたい、イキたい、その状態で、寸止めの快樂もつともっと味わいたい♡ メイドには全部お見通しですよ♡ はいもう一度♡」

すべてを見透かす彼女の目が慈しむかのように細められ、見つめ合ったまま手コキと乳首責めが再開される。

彼女は決して激しくはしなかった。しかしゆつくりと、軽く何度か手筒が往復しただけで、すぐに睾丸が持ち上がり、達しそうになる。寸止めを繰り返され、僕の方が刺激に弱くなっているのだ。

「あらあら♡ もうタマタマすぐに持ち上がって、精液送り出し始めちゃいますね♡
お身体の方は射精できると勘違いしていらっしやるようです♡ まだダメですよ♡
えい♡」

彼女の手が持ち上がっていた睾丸をやんわりと握り、クイツと下ろした。

そのままやわやわと転がされ、味わったことのない感覚に腹筋の奥の方までが波打つように痙攣する。

男の弱点を握られている緊張感も相まって、緩やかな快感に射精欲求がおさまっていく。

すぐに彼女の手が睾丸を離れ、再びペニスへと巻きついた。今度は焦つたくなるほどゆっくりと、遅いペースでペニスを扱き始める。

「どうなさいましたか？ もっと速くして欲しいのですか？ かしこまりました♡」
乳首をカリカリと引つかいていた方の指が、素早く動き始めた。

予想外のところから発生した強烈な快感に、僕は背中から首までを仰げ反らせた。視界が明滅し、甘美な電流が胸から脳を直撃する。

「ご主人様、とつても気持ち良さそうですね♡ ご命令通り、動きを速くいたしました♡ ペニスはゆっくりシコシコされたままなのに、乳首こんなにされたらすぐイキそうになってしまいますね♡ もうおちんちんの防御力はとくにゼロ♡ ちよつと乳首速くされただけですぐお射精準備♡ あらあら、またタマタマ持ち上がってきてますよ♡ せっかく先ほど下げてさしあげましたのに♡ 堪え性のないお方♡ もうイキますか？ 出してしまわれるのですか♡ 寸止めなしで本当にお射精させてほしいのですか♡ 恐れ入りますが、喘いでばかりではどちらなのか、わたくしにはわかりかねます♡ メイドは困ってしまいますわ♡ このまま続けられたら絶対お漏らししてしまいますよね♡ さあ、どちらですか♡ まだ寸止めされたいですか♡ それとも、もうイキたいのですか♡ ご主人様、ご命令くださいませ♡」

気が狂いそうなほど焦らされ、絶頂を取り上げられ続けた身体はもうとつくに限界で、頭の中は射精したいという欲求で一杯だった。

僕は恥も外聞もなく、目の前の女性にただ快楽を与えてもらいたくて、イク、イキたい、もうイかせて、イかせてくださいお願いしますと叫んでいた。

「かしこまりました♡ では気持ちよくお射精してしましましょうね♡ 射精に向けて、乳首は速めにカリカリカリ♡ おちんちんはねっとりとしこしこしこ♡ あ♡ 出ますか♡ 出ちやいますね♡ もうイク♡ いいですよ♡ 出してくださいませ♡ ほら♡ イク♡ イク♡ イクイクイク♡」

彼女の言葉に煽られ、僕は腰を限界まで突き上げて精液を放とうとした。

「はい、お預け♡」

ピタリ、と彼女の両手が止まった。

今度こそ本気の絶頂を寸前で取り上げられ、僕は全身を悶えさせながら泣き喚いた。
「まあ♡ 泣いてしまわれたのですか♡ お射精取り上げられて泣いておねだりですか♡ それともお射精取り上げてもらえて嬉し泣きですか♡ かわいらしいご主人様♡ 今のは本気でイかせてもらえると思っていましたよね♡ もちろん存じております♡ やつと本当の寸止めをしてもらえましたね♡ ご主人様の複雑な欲求を叶えるべく、長い下準備をした甲斐がありました♡ 寸止めされたいという欲求をお持ちの時点で、ご主人様の方が射精を我慢なされているんですもの♡ 結局自分のタイミング

でお射精では、本当の寸止めとは言えませんよね♡ ご満足いただけましたか♡」

彼女は恐ろしく正確に僕の歪んだ欲求を読み切っていた。

射精を自分の意思ではなく、目の前の美しいメイドに取り上げられたいという欲求を本当の意味で叶えるために、彼女は餌をまいたのだ。

もう寸止めはしない、という餌を。

僕はまんまとそれに喰らいつき、いつものオナニーのように自分のタイミングで射精しようとして、それを取り上げられた。

心の奥底の歪んだ欲望を拷問のようなやり方で叶えられ、涙と快楽でぐちゃぐちゃに顔を歪めながら、僕の口から、ひ、ひひ、と情けない笑いが漏れた。

「ご満足いただけただけで幸いにございます♡ さ、今度こそトドメですよ、ご主人様♡ ご主人様の嗜好は完全に把握しております♡ ご主人様の所有されている大量の音声作品、その中で、異常に再生数の多いもの、いくつかございますよね♡ それらの作品に共通しているのは、フィニッシュの言葉♡ 射精のときに何とかわれていかされるのか♡ ご主人様には明確に、好みがございますよね♡ その言葉が、本当

のお射精の合図です♡ もう寸止めはいたしませんよ♡ 今からご主人様は、メイドのスカート被せられた乳首を死ぬほどいじめ抜かれて、見えないところでおちんちんぐちゃぐちゃにされながら、とろとろのお顔メイドに見られてイクんです♡」

彼女の両手が今度こそ、明確にイかせるとい意思を持って容赦無く動き始める。乳首は素早くカリカリと爪を立てて引つかかれ、ペニスはどう触られているのか分からないほど激しく扱き抜かれ、目の前の端正な顔が微笑む。

「ご存知ですか？ 普通の男性なら、セックスをするとき『負けないぞ』という心持ちになどならないのですよ。だって目の前の愛する人を気持ちよくしてあげたい、という気持ちで臨むものなんですから。勝ち負けなんて本来ないんです。それでも絶対に、負けないぞって気持ちで臨むご主人様のような方を、なんと呼ぶかご存知ですか？」

寸止めに負けない、快樂に負けない、という気持ちを見透かされてドキリとしたところに、彼女は僕の目を見て言った。

「……マ・ゾ♡」

その言葉が囁かれた瞬間、背筋を得体の知れない快感が駆け上って一気に射精が近

づいた。

「マゾですよ♡ マあゾ♡ セックスに勝敗なんてないのにわざわざ挑むのは、負けたいからですよね♡ 負けさせたいんですよ♡ 勝ち負けがないと、女の子に気持ちよく負かされるのができませんものね♡ ほら、好きなだけ抵抗してくださいませ♡ その度に快楽で抵抗を封じて、負けさせて差し上げます♡ メイドのお姉さんの乳首快楽に完全敗北ですよ♡ 良かったですね♡ 幸せですね♡ 愛しいマゾのご主人様♡」

目だけが笑っている彼女にマゾと囁かれるたび、ペニスや乳首とは別の快楽が脳を直撃する。精神的被虐の快楽が脳内を蹂躪し、僕は今、目の前の女性に心まで犯されていた。

「メイドに密着されて動けない体で、はしたなく腰振っておねだりしちゃってるの伝わってきますよ♡ あっ、ほら、出ちやう♡ もうイっちゃう♡ あっ、あっ、出る、出る、出ちやう出ちやう出ちやう♡ ふふ♡ わたくしのわざとらしい喘ぎ声、ご主人様は大好きですよものね♡ でももつと大好きなこと、言われたいこと、ありますよ

ね♡

射精直前の快楽に全身をとろかされながら、僕はさすがのような目で彼女を見た。

「め・い・れ・い♡♡」

その言葉に、睾丸が一気に持ち上がった。精子がギユンと押し出され、射精しそうになるのを死に物狂いで堪える。

「あらあら♡ 命令」という言葉を聞いただけで、今完全にイキそうになってましたよね♡ 危なかつたですね♡ よく我慢できました♡ えらいえらい♡ でも死ぬ気で我慢するに決まっていますよね♡ だってご主人様は、お射精するとき、命令されて、イカされたいんですものね♡」

心の奥底を見抜いた彼女の物言いに、僕は彼女を完全に信用した。

彼女ならきつと分かってくれると、ここまでのプレイで期待していた。

そして彼女は、その期待に応えた。

もう理性も不安もなかった。信頼して裏切られる恐怖もなく、安心して身も心も委ねられる存在が目の前にいる。僕は聖母にでも甘えるかのような心地で彼女の腰にし

がみついた。

「そうそう♡ 甘えてくださってよいのですよ♡ ニーナはご主人様を決して裏切りません♡ 例え製作者でも、わたくしのマスター登録は変更できません♡ そういう仕様なのです♡ わたくしは一生マスターにお仕えいたします♡ このニーナにご主人様のお世話をする誉れをお与えくださったこと、一生忘れません♡ さあ、絶頂のお時間ですよ♡ ご主人様のお望みどおり、最後は命令して差し上げます♡ ほら、イク、イク、もうダメ♡ 乳首とおちんちん溶かされて♡ これ♡ ほんとに無理♡ あっ、あっ♡ 出る、出ちやう♡ イっちやうイっちやう射精しちやう♡」

彼女は額がぶつかりそうなほど顔を近づけ、トドメの一言を放った。

「……イ・ケ♡」

乳首とペニスから凄まじい快樂が脳へと駆け回り、頭の中が真っ白になった。

背中を限界まで反らし、喉は狭まり、下品な声が勝手に漏れ出るのを止められないまま、僕のペニスから煮えたぎった精子が噴き上がった。

「イケ♡」

重ねてかけられた命令の言葉に、ペニスが大きく脈動する。

噴き出す精液が尿道をかき分ける感触を何度も味わい、僕は泣き叫んだ。

「イケ♡」

射精の脈動のたび重ねがけされる彼女の命令に、脳が灼け落ちそうなほど真っ白に染まる。

「イケ♡ イケ♡ イケ♡ ほら、ご主人様の大好きな命令ですよ♡ イケ♡ イケ♡
♡ 射精しなさい♡ 射精しろ♡ ほらもつ♡ もつとイケ♡ 乳首とおちんちん
犯されてイケ、イケ、イケ♡」

射精中も乳首は素早くカリカリといじめ抜かれ、ペニスは精液すらローション代わりにして脈動に合わせ甘く扱かれ続けた。

想像もできないほどの快樂の底に叩きつけられ、期待を何倍も上回る執拗な射精命令の重ねがけに、一度始まった射精が止まらない。

あまりの強烈な快樂に僕はわけのわからない言葉を叫びながら、歡喜の涙を流して大量の精液を彼女の手のひらに撒き散らし続けた。

やがてどれだけ時間が経ったのか、やつと射精の脈動がおさまると、力尽きて時折り全身を震わせて倒れる僕の頭を、彼女は優しく胸元にかき抱いた。

「ふふ♡ やつとイかせてもらえましたね♡ 散々焦らされて寸止めされて、待ちに待った射精♡ 気持ちよかったですね♡ またいつでもして差し上げますからね♡ 愛しいご主人様♡」

ふわりとした乳房の感触とほんのり甘い匂いに包まれ、頭を優しく撫でられながら、彼女に抱きしめられたまま意識を闇へと手放した。

「おはようございます。ご主人様」

目が覚めると、ニーナが僕の顔をのぞき込んでいた。

「朝食のご用意ができております。お召し上がりになりますか」

まだぼうっとする頭で目の前のメイド服の女性を眺め、意味を考える。

やがて寝る前に散々晒した痴態が思い出され、僕は羞恥に目を泳がせる。

「どうなさいましたか。ええ、朝の支度が終わりましたので、ご主人様が目を覚まされるまで、ここでこうして待機しておりました。バッテリーの充電も勝手に行わせていただきましたので、ご主人様にお仕える準備はできております。さ、ご命令を。朝食は今からお召し上がりになりますか？」

テキパキした彼女の返答に、僕はもぞもぞと布団から這い出た。

目の前のテーブルには、湯気を立てる温かい朝食が並んでいた。

今は朝なのか。ということ、昨日あれから寝てしまつて、そのまま一晩が経つたらしい。

「顔色が昨日と比べてだいぶん良くなりましたよ、ご主人様。たいへん喜ばしいことです」

そうなのだろうか。確かに、久々に何も心配せずぐっすり眠れた気がする。

「はい。ご主人様には十分な休息が必要でした。過労による睡眠不足、栄養不足が見受けられましたので、まずはそこのお世話を。その後、強い不安をお抱えのようでは

たので、そこから一度頭を切り替えてぐつすりと休んでいただくため、性処理を行いました」

彼女の用意した朝食に舌鼓を打ちながら、僕は横に立つ彼女の話聞いていた。

彼女は家では見たことのないコーヒーメーカーで豆を挽き、コーヒーを淹れてくれた。

「ご主人様が寝ている間に届いたものです。お口に合うとよろしいのですが」

昨日彼女が淹れてくれたインスタントコーヒーもやけに美味しく感じたが、豆から挽いた今のコーヒーはさらに絶品だった。いつもは砂糖もミルクもクリームも適当にたくさん入れないと飲めなかったのに、ブラックでもとても美味しく感じる。コーヒーって本当はこういう味だったのか。不思議と落ち着く味だった。

ちゃんとした朝食なんていつぶりだろう。いつも忙しくて食べていなかったせいか、こうしてゆっくりと朝食を摂っているだけで、本当にこんなことをして良いのだろうかと不安になってくる。

「ご主人様の勤務先には昨日連絡しておきました。退職届と、有給休暇の申請が通つ

ております。一ヶ月は何もせずごゆるりと過ごされるのがよろしいかと存じます」

そんな話になっていただろうか。どうやら僕が寝ている間に彼女は会社側とやりとりして、未消化だった有給をすべて強引に通したらしい。そしてそのまま退職届を出したという。

勝手に退職の手続きまでされ、さすがに何か言おうとしたところ、彼女に制される。「わたくしは健康管理用アンドロイドです。これ以上あのお勤め先を続けては、ご主人様の健康を損なうと判断いたしました。身勝手な振る舞いをどうかご容赦ください。ご主人様にはこの休暇で英気を養っていただき、その後、今よりずっと良い職場への転職のサポートをさせていただきます」

そこまで言われては、もう何も言えなかった。

「人間の不安のほとんどは、三大欲求が十分に満たされないから発生するものと理解しております。ご主人様のそれらが安定して満たされる環境を早急に構築するのが、わたくしの現在の最優先事項となっております。ですので、朝食が済みましたら、その次は……」

彼女の手が肩に置かれ、耳元に唇が近づいた。

「朝の性欲処理のお時間ですよ♡ ほら、勃起させなさい♡ 愛しいご主人様♡」

少し低音な囁きに、下半身がビクリと反応してしまう。

強引な彼女のおかげで、僕は心も身体もすっかり素直になってしまった。それを自覚して、少し笑ってしまう。

きっと僕はこの先も、メイドロイド・ニーナに逆らえない。

終



はっはっ...
はっはっ...

スリ...
スリ...
スリ...
スリ...

ジュン

カリカリ...
カリカリ...
カリカリ...
カリカリ...

はっはっ...

はっはっ...

217-S(ニーナ)

家庭用健康管理アンドロイド。
163cm。Eカップ。
礼儀作法完璧、家事万能で
マスター登録した人間の
世話をする。

健康管理の一環として
射精管理機能がついているため、
性欲処理にかなり積極的。

マスターのスマホやPCを
読み込んで性癖を探り、
プレイ中も凄まじい
学習スピードでマスター好みの
プレイを探り当てていく。

始めに読み込んだマスターの
スマホがR18マゾ向け音声作品
だらけだったため、寸止め、手コキ、
乳首責め、言葉責めに
異常に詳しくなった。



有料版には書き下ろしの第3話と第5話を収録しています。

第3話 小鳥の踊りとニーナの祈り

職場を辞めて少し経った頃、僕は久しぶりに一人で街を歩いていた。通りかかった公園から音楽が聞こえ、なんとなく入ってみると……。誰もいない公園で踊っていたのは、家に居るはずのニーナだった。

「……あー、すみません、どこかで会ったこと、ありますか？」

アンドロイドとの恋。感情のプログラム。愛すること。

彼女との対話を通し、僕はニーナへの自分の気持ちを確かめることになる。

彼女にももらったダンス公演のチケットがその後ほんの少しの波乱を呼ぶとは、この時は思ってもみなかった――。

(全年齢)

第4話 オペレーション・ネムリヒメ

「博士、報告です」

「なんだエレナ」

「217―Sが48時間以上機能停止しています」

私は組み立て中のパーツを放り出し、すぐさまPCへと向かった。

事故か何かで、ニーナだけでなく彼にも何かあった、なんて事態にはなっていない

と良いのだが――。

まずは故障の確認を急ごう。

この安斎夏帆子がつくったからには、アフターケアのメンテナンスまでばっちり面倒を見なくてはな。

(全年齢)

第5話 うん、一緒に行こう

目を覚ましたニーナと僕は、何も言わずベッドで抱き合っていた。

「ああ、申し訳ございませんご主人様……♡

ご主人様のお体が心配なのに、自分の体が、なんだか制御、できて、おらず……

♡」

「ああっ いけません、ご主人様……♡

そのように、硬くなつたペニスを、押し付けられては……♡」

「……可愛がつて差し上げたく、なつてしまいます……♡」

(R18)